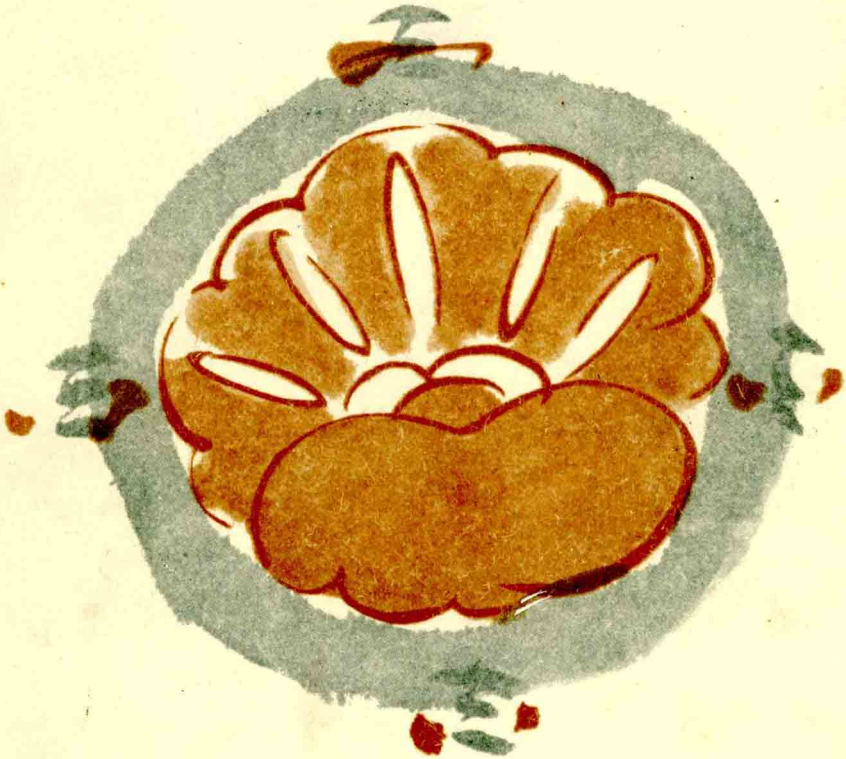
文藝評論



小林秀雄

第一刷

昭和六年七月五日印刷
昭和六年七月十日發行

定價二圓二十錢

著作者　小林秀雄

發行者　株式會社　白水社
代表者　福岡セイ
東京市神田區小川町三〇

印刷者　村田豐吉
東京市京橋區新榮町五丁目七番地

印刷所　株式會社　大倉印刷所
東京市京橋區新榮町五丁目七番地

製本所　中野製本所

發行所　株式會社　白水社
東京市神田區小川町三〇
電話神田　三五九八
振替東京　一一九二二

昭和六年刊

小林秀雄著

文藝評論

東京 白水社版

文藝評論 目次

からくり　五頁
様々なる意匠　一四頁
志賀直哉　四〇頁
アシルと龜の子　一　六二頁
アシルと龜の子　二　八〇頁
アシルと龜の子　三　九七頁
アシルと龜の子　四　一一五頁

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

文學は繪空ごとか　一二五頁
物質への情熱　一四〇頁
横光利一　一五八頁
マルクスの悟達　一七四頁
文藝時評　一九四頁
批評家失格　二一〇頁
心理小說　二二〇頁
批評家失格　二三五頁

裝幀　青山二郎

からくり

一九三〇・一

或る日

俺は「ツエッペリン伯號世界一周」といふ活動寫眞をみてゐた。「ええ、畫面をよく御覽になりますると、中央に於て二雙の汽船が衝突して將に沈沒せんとしてをります」と辯士が喚く。バルチック海で人しれず沈沒しちまひたい處を、たまたま通りがかりの風船に見つけられてしまつたらしいのである。いい面の皮だ。幸な事には辯士の聲に見物一同一齊に眼を見張つたが、チョッピリ黑いお團子が見えただけで何が何やらわからない。「ええ、これがシベリヤの大森林、地質學などに興味をもたれる方々には實によだれの垂れさうな光景であります」と今度は意味を成さない樣な事を言ふと、大佛樣のいぼいぼみたいなものが一面に現れる。「ツエッペリン伯號唯一人の密行者」で、何んとかヘイ夫人といふ厭味な年增が黑い小猫に頰ずりしてゐる。何とか特派員がタイプライタアを叩いたり、アメリカの百萬長者がうで玉子を食つたり、海が映つたり、雲で映らなくなつたり、じやがたら芋を

並べた様なロッキイ山脈を難航したりするうちに、風船は凡そ世の義理人情を無視して澄まして世界を一巡して了つた。「一見甚だ變哲もない寫眞でありますが、よくお味ひ下さつた方々には、實に興味津々たる映畫であつたと信じます」と辯士がまことに當を得た辯解をすると、電氣がパッとついて俺は見事にスカされた。俺はしよつちゆう世の中にスカされてゐる男であるとは思つてゐるが、これは俺の方から世の中をスカす傾向があるが爲だと觀念してゐるから別に腹も立たない。だが、鑑賞の世界では、鑑賞の世界などと判然しない言葉だが、おまけに蟲の好かない言葉だが、豚だとか藝術だとかペンペン草だとか色事だとか凡そ世の種々な存在を、聊かも行爲する事なく眺めるといふ人の心をいふのである。この世界では、俺は生れてから何一つスカした覺えはない、豚が俺をスカさない様に俺は豚をスカさない。處が、藝術といふ名で包攝されてゐる、人間のあらゆる意識的記號の戯れだけが、無暗と俺をスカすのは奇妙である。そして俺は大變苦々しい氣持を味つて了ふのだ。成程俺の頭は、本物の豚のしつぽが本物の豚のしつぽである様に本物の藝術品が本物の藝術品である事を心得てゐる、又、俺の頭は、俺が生れた國の血にかけて、本物の豚のしつぽは本物の藝術品に較べて上等でも下等でもない事を承知してゐる。だが、こ

んな事を承知する事は俺の苦々しい氣持を增しもしなければ減らしもしない。

俺は雜沓の裡を行き乍ら、いつもの通り不幸であつた。黑色がすべての輻射光線を吸ひ込んで黑色である樣に不幸であつた。俺は俺の不幸をいつくしまうとは思はない。が、なるたけならば何時までも、人々の指先につつかれる事なく（たとへその指が蠟細工であらうとも）嚙みしめた儘でゐたいと念ずる。だが、生得さもしい俺の根性はなかなかさうはさせてくれない。俺は無意味に脅されて、一種抒情的な奇蹟を夢みて了ふ。又、神樣も俺の根性は知つてゐるから、世の最もささやかな風景にもこの奇蹟をかくして置くのであつて、俺の發見には少しも手間がかからない。神樣の方かそれとも俺の方か知る由もないが、兎も角どちらか一方の根性が曲つてゐる事をうらめしく思ひ乍ら、俺は、水族館には入り、地下室でお魚の泳ぐのを見て、二階で女の子が踊るのを見ようと心を定めた。

小屋には入らうとして懷をさぐつてみると、一錢玉を五十錢玉だと信じてゐた爲に、五錢足りなくなつては入れなかつた。風船に乘つて世界を一周する奴と、五錢足りなくてお魚と女の子の踊が見られない奴との懸隔を、俺は暫く馬鹿な顏をして思案した後、以前に經驗もあつた事だから、五錢玉位おちてゐるだらうと、懷手をして地べたを見廻し乍ら、

のろのろ歩き出す。

何の裝飾も許さない解析の螺階を登り始めてから幾年になるだらう。遠い昔の樣にも思はれる、又つい昨日の事の樣にも思はれる。俺は豫期した通り、自分の歪んだ面相に衝き當つた許りだ。この歪んだ面相は如何にも解析出來兼ねるとあきらめる時、俺は自分の運を摑んだと思ひ込む。そして、人々が俺の運を嘲笑ふ權利がある樣に、俺は人々の運を嘲笑ふ權利があると思ひ込む。こんな時、俺に、自分の運を透してこの世を一色に塗り潰すことは如何にも容易である。例へば、俺が、ヴァレリイの絶望した明晳も、ブルトンの狂喜した感性も、たわいもなく同質な細胞だと認めて恥ぢない事は如何にも容易である。それにしても不幸のからくりは幸福のからくりに較べて比較にならぬ程入り組んでゐるらしい。俺は俺の不幸の迷路に道を失つてゐるのかもしれない、或る時俺の幸福の大道が俺を誑した樣に。とまれ、人は夢みる術を知つてゐる以上、夢の浪費を惜む事は許されまい。誑されるのが生きる事ではない。生きる事が誑される事なのだ。この瓜二つに見える言葉は、俺には全く異つた音を傳へる樣だ。

俺はこんな痴呆の樣な思案には倦き倦きしてゐる、倦き倦きしてゐればこそ俺の頭は歩

き乍ら勝手に痴呆の様に思案するのである。そして穴のあいた五錢玉發見の注意力は聊かも鈍らされはしないのだ。

うしろから俺の肩を叩くものがある。振り向くとXであつた。（今は冬であるから、彼もまた外套を着て手袋をはめてゐた）俺はもう五錢玉を捜す必要がなくなつた事を殘念に思つた。彼は俺にスタウトを二本のましてくれて、レエモン・ラジゲの「ドルヂェル伯爵の舞踏會」といふ小説を讀めと言つた。ラジゲといふのは廿歳で死んだフランスの少年である。俺は大部以前この男の「ディアブル・オオ・コオル」といふ小説を電車の中で讀みとばした事を何の感慨もなく思ひ出した。一體フランスなどといふ小説の立派な傳統のある國で、子供の癖に小説を書くなどととんでもない奴だ。日本といふ國は、これは又格別な國だと俺は思つてゐる、生れてから世の中にいぢめられた事もない子供が、浮世を茶にしたがつたり、最も單純な人情の機構も知らない子供が、社會科學で當代をしよつて立つたり、山に登るとなぜ空氣が冷くなるかといふ物理の問題も判然しない頭で、傳統を輕蔑したり、娘つ子にからまれても法がつかなくなる癖に、超現實主義などと飴屋の旗みたいなものを鉢卷にさしてみたり、落語に出てくる香具師は、當節でつち物なんか出しては仁が

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

寄らないと一つ目小僧を捜しに出掛けるんだが、こいつを一つ目小僧の方で、當節はでつち物でなきや仁が寄らねえてんだから凄いねえ。御時世だよう。

Xは俺の話を聞いてつまらな相な顏をした。俺も仕方がないから、つまらな相な顏の眞似をした。

「そいで、如何しても讀まないといふんだな」

「どうせスカされるんだ、いやなこつた」

「じや勝手にしろ、馬鹿」

もちろん俺は、其夜家に歸り、炬燵に火を入れ、南京豆をたべ乍ら、ひそかにラジゲを讀み始めたのである。一體がさもしい根性からだ。尤も、どうせ退屈なのなら何を讀んだつて同じ事だし、又この際、このジャン・コクトオの稚兒さんを決定的に輕蔑しておくのも惡くはあるまいと考へたのだ。

處が、思ひもかけず俺はガアンとやられて了つた。電氣ブランか女かでないと容易に働きださない俺の腦細胞は、のたのたと讀み始めるや忽ちバッハの半音階の樣に均質な彼の文體の索道に乘せられて、燒双のにほひの裡に、たわいもなく漾つて了つた。

俺は一氣に、(尤も俺はあんまり幸福になつて途中で、本の上にだらしがなくよだれを垂らして暫く眠つた)夜明け近く「ドルヂェル伯爵の舞踏會」を出た。

惡かつた、勘辨しろ。如何にも見事なものである。俺は坂東三津五郎の奴に泣きさうになる樣に泣きさうになつた。三升家小勝の落語をきいて外に出ると世の中の何も彼もがしやら臭く見える樣に、俺は彼の舞踏會を出て、凡そ近代小說がどれもこれも物欲しさうな野暮てんに見えた。これ程的確な颯爽とした造型美をもつた長編小說を、近頃嘗つて見ない。それにしても子供の癖に何んといふ取り澄し方だらう。やつぱり天才といふものはあるものだ、世に色男がある樣に。アンドレ・ジッドの禿げ頭が、純粹小說とかいふものを七年間も書きあぐみ、「贋金造り」等をでつち上げ、おまけに氣障つ氣な樂屋落まで別冊で出版して、ええ、所詮はすつぽんの地團太だ。

想へば廿歲で死んで了つたとは如何にもくやしい事である。ほかに死んでもいい奴が佃煮にする程ゐるものを。

だが、逆上まい、俺は靜かにしてゐなくてはならぬ。

彼が神樣の兵士等に銃殺されるのだと自分の死を豫言した時、ベソを書いたジャン・コク

トオに言つた。「一つの色が漾つてゐる。人間共がその色の裡にかくれてゐる」と。コクトオがそんな人間共は追拂つて了つた方がよくはないかと彼に訊ねると、彼は、「あなたには追拂ふ事は出來ない、あなたには色が見えないのだから」と答へた、とこの小説の序文でコクトオは書いてゐる。

彼の眼の前に搖曳した色は、人間血液の燦然としたスペクトルだつただらうか、それとも彼の文體そのままにナトリウムのスペクトルの様な燻がかかつてゐたのだらうか、俺に知れよう筈はない。だが、俺は信ずるが、彼はある色を鮮かに見たに相違ない、その色の裡に人間共がすべて裸形にされ、精密に、的確に、靜粛に、擔球裝置をした車軸の様に回轉するのを見たに相違ない。神の兵士等に銃殺されたこの人物が垣間みたものは、正しくこの世のからくりだつたに相違ない、そして又恐らく同じあの世のからくりだつたに相違ない。

俺は冷くなつた炬燵に頰杖をつき、恐る恐る思案した。——俺を支へてゐるものは俺自身ではなく俺の過去なのかもしれない、いや、ただ俺の過去に過ぎまい、そして、俺がどんなに俺の過去を勞らうと、俺の過去は所詮俺には赤の他人に過ぎまい。——

俺は林檎を二つ食ひ、水をのみ、一切が失はれた様に思ひ、光が走る様な音を聞いた。

夜はとうに明けてゐた。俺は外に出た。雲が空をつつんで、人氣のない街に、冷い強い風が吹いてゐた。俺は出掛けに門口で拾つた山陰を旅行してゐる從弟からの繪葉書を讀んだ。

「こんな石段を二百四十七も登ると雪の中にケチな御堂があります。馬鹿みちやつた。もちろん名前なんかわからないが渡り鳥の大群が風で凹んだり出つぱつたりし乍らやんやん飛んで來ます。今、山のお湯にゐます。お湯の中でチンポコが實に可愛らしく見える。目下大衆文藝を讀破しつゝあります。さよなら。」

表をひつくり返すと、寫眞にはただただ藝もなく石段許り寫つてゐた、俺は感服して曇つた寒空を見上げた。俺の首はどうやら渡り鳥を捜さうとしたものらしい。

様々なる意匠

一九二九・四

懷疑は、恐らくは叡智の始かも知れない、然し、叡智の始まる處に藝術は終るのだ。

アンドレ・ジイド

一

吾々にとつて幸福な事か不幸な事か知らないが、世に一つとして簡單に片付く問題はない。遠い昔、人間が意識と共に與へられた言葉といふ吾々思索の唯一の武器は、依然として昔乍らの魔術を止めない。劣惡を指嗾しない如何なる崇高な言葉もなく、崇高を指嗾しない如何なる劣惡な言葉もない。而も、若し言葉がその眩惑の魔術を捨てたら恐らく影に過ぎまい。

私は、ここで如何なる問題も解決仕様とは思はぬ、如何なる問題も提出仕様とは思はぬ。私はただ世の騷然たる文藝批評家等が、騷然と行動する必要の爲に見ぬ振りをした種種な事實を拾ひ上げ度いと思ふ許りである。私はただ、彼等が何故にあらゆる意匠を凝ら

して登場しなければならぬかを、少々不審に思ふ許りである。私には常に舞臺より樂屋の方が面白い。この樣な私にも、やつぱり軍略は必要だとするなら、「搦手から」、これが私には最も人性論的法則に適つた軍略に見えるのだ。

二

文學の世界に詩人が棲み、小說家が棲んでゐる樣に、文藝批評家といふものが棲んでゐる。詩人にとつては詩を創る事が希ひであり、小說家にとつては小說を創る事が希ひである。では、文藝批評家にとつては文藝批評を書く事が希ひであるか？恐らくこの事實は多くの逆說を孕んでゐる。

「自分の嗜好に從つて人を評するのは容易な事だ」と、人は言ふ。然し、尺度に從つて人を評する事も等しく苦もない業(わざ)である。常に生々たる嗜好を有し、常に潑溂たる尺度を持つといふ事だけが容易ではないのである。人々は人の嗜好といふものと尺度といふものとを別々に考へてみる、だが別々に考へてみるだけだ、精神と肉體とを別々に考へてみる樣に。例へば月の世界に住むとは人間の空想となる事は出來るが、人間の欲望となる事は出來ない。守錢奴は金を蓄める、だから彼は金を欲しがるのである。人は可能なものしか眞

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com